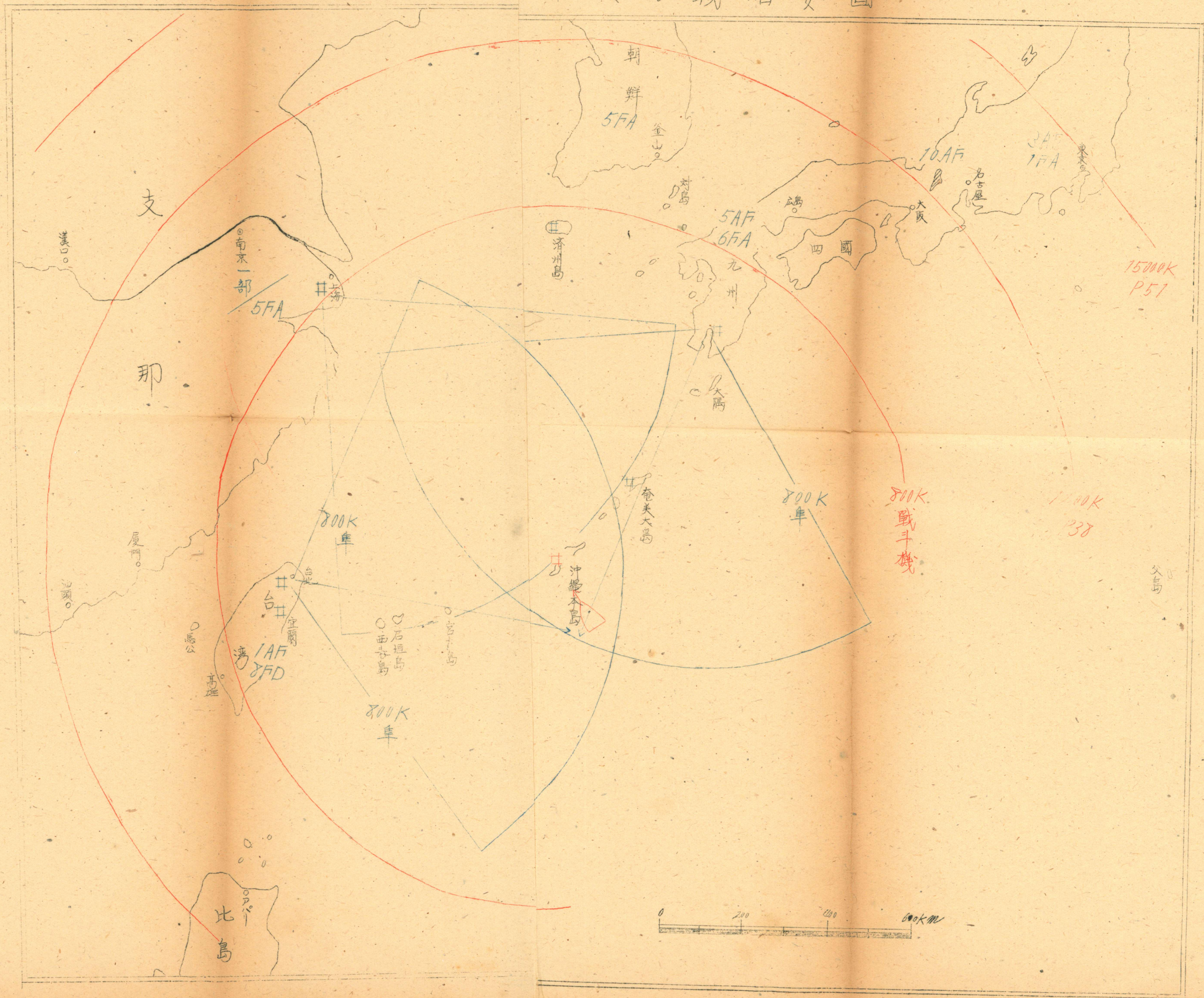
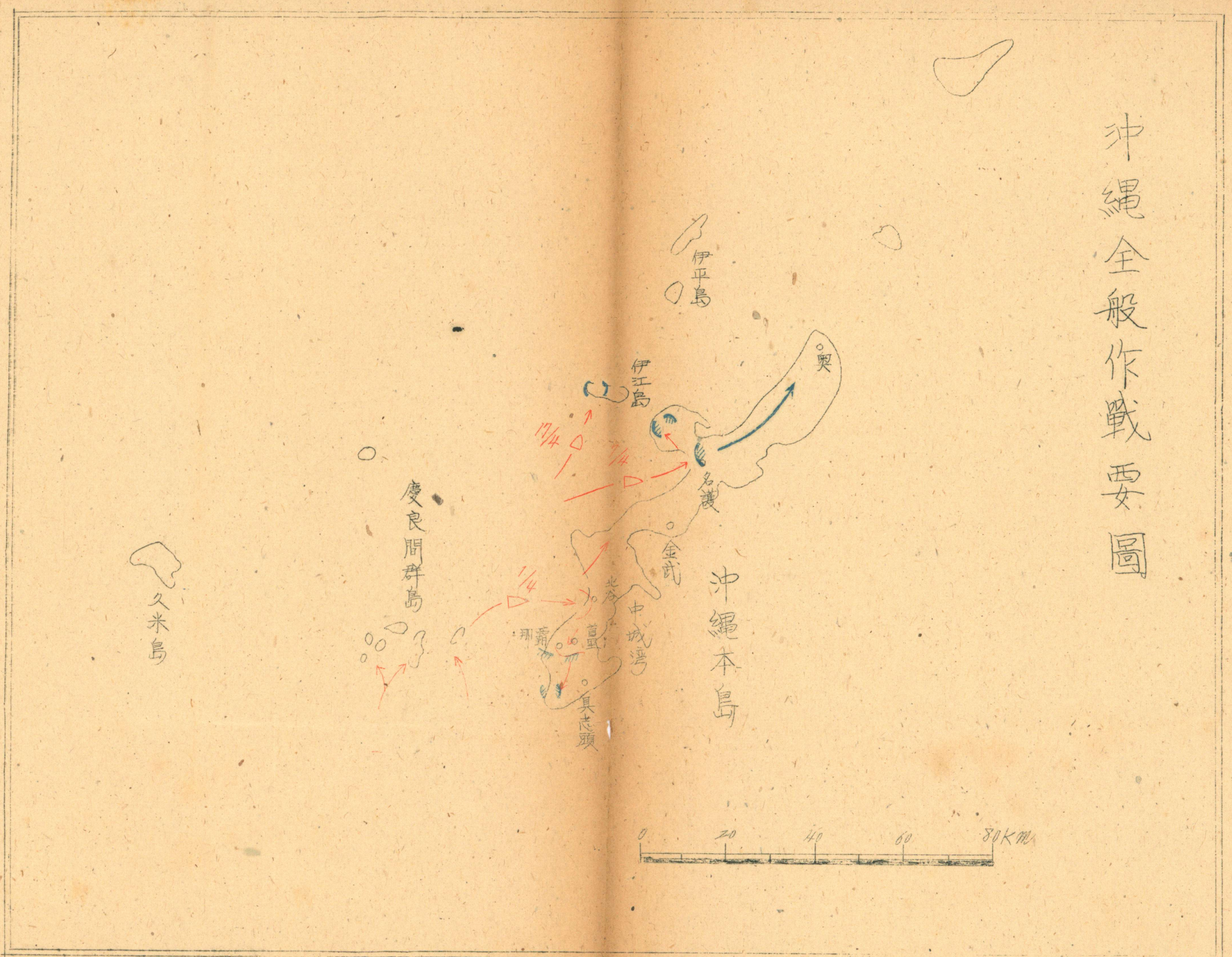


沖繩ヲ中心トスル戰略要圖



沖繩全般作戰要圖



第六節 沖繩作戦（附圖参照）

（一）沖縄群島の地位

南洋西群島は日本列島、臺灣に連鎖する大陸の防壁を成して居る其の中核を形成して居る沖縄本島は多數の飛行場基地に充ちられて居る許りでなく良好なる海軍の基地もあり又臺灣の群島伊江島、竹之島にも飛行場基地を有して居る北は土城野群島を経て九州に、南は牛島列島を経て臺灣に夫々通つて居る。九州と臺灣に至る距離は約七〇〇浬、上海及南朝鮮に至る距離は夫々約八〇〇浬乃至九五〇浬であつて西日本、朝鮮、臺灣、支那大陸を結ぶ鎖輪を成し小笠原群島、臺灣と相俟て本土、朝鮮、支那大陸防衛のため最も重要なる戦略要地を成して居る

此の島に進攻する米軍は南洋群島及九州、臺灣、大陸に基をせられたる基地に於て日本の海軍の求心的攻撃を受ける地位に立つ。而して一先米軍が此島を占領すれば本土、朝鮮、支那大陸、南方諸島

地獄へ全臺灣への門を完全に分断し戰術適合の空軍を以て是等の要地にも有数なる攻撃を加へ得る尙其の上には是等の地域に對する上陸作戦の基盤を築く事になる

（二）沖縄本島の作戦準備

一九四四年三月西大本營は「マーシャル」群島の戦況に鑑み沖縄群島の防備を重視し十勝作戦準備を命じた。此の作戦準備の思想は西群島及臺灣東岸の航空基地を強化し是を確保して九州基地と相俟て沖縄に進攻して來る米軍に對し東面する航空作戦を完遂せんとするに在つた。之が爲に之島、沖縄本島、伊江島、宮古島、石垣島及宜野、喜望の航空基地を擴張又は新設して是等の基地確保に必要なる地上兵力即ち第三十二軍の配備に着手した。又一九四四年七月頃中部太平洋の戦況悪化するに及び大本營は既述の様に此の方面に於て第二師作戦を準備した

其時作戦準備に依り此の方面作戦準備の急務は前文に於て既述した所であるが一九四五年初頭比島方面の急に對慮する爲に沖縄本島防備

の中核兵團たる第九師團を南部臺灣に轉用した。當時此の第九師團の抽出は新に内地より第八十四師團を沖縄本島に投入する陸軍の下に行はれたが其後本土防備の急と離島に對する兵力投入の價值に關する見解に異論を生じ南西諸島に對する米軍の進攻を豫期しあつたに拘らず遂に是を中止した。此の豫期は爾後沖縄本島の作戰進備と作戰指導に大なる影響を及ぼした。以上の経過を経て一九四五年二月頃迄於ては沖縄本島の地上兵力は二個師團半（別に往之島に一個旅團を配備す）とあつた。本島の飛行場建設は七個であつたが完成はして居なかつた（別に往江島に二個、往之島に一個を建設中であつた）。陸地機銃は自然洞窟を併用する洞窟陣地に徹底し機銃射撃に對峙し得る様子を期し略々完成した。但し第九師團の抽出に伴ふ兵力調整等の關係上各部隊は終始工事の忙殺せられて訓練を實施する餘裕に乏しかつた。補給は糧秣十ヶ月分、被服一會服分、航空用燃料彈藥一ヶ月間の一ヶ月分を去々集積し得た。

（三）作戰計畫

（一）大本營の計畫

大本營は第一節既述の情勢判斷に基いて四月頃以降此の方面に於て沖縄本島に對する米軍進攻の算氣め多きものと認め一月二十日決定したる帝國陸海軍作戰計畫大綱に於て三月頃迄に此の方面の作戰進備を完成することを期した。然しながら比島方面の作戰に於て海空戦力の増強を消滅した直後であつたので此の進備の完成は非常な困難なる軍事が多く三月末米軍が來攻した際空軍の展開未完の爲有効なる第一撃が加へ得なかつた。其の作戰目的は本土防衛の爲に深作戦遂行の前線基地として南西諸島の要地を確保し萬止むを得ざる場合に於ても鉤迄米軍に大痛撃を與へ極力米軍の航空基地の設定利用を阻止妨害し米軍の本土、朝鮮、支那沿岸に向ふ進攻を封殺するに在つた。此の目的を遂げる作戰指導の方策は守備隊を以て南西諸島を確保し來攻する米軍を撃碎して米軍の進

攻を阻止抑止し九州、南朝鮮及揚子下流地域と相俟つて航空作戦遂
行の據點をらしめ陸海空戦力の綜合發揮して米軍を東支那海洋
上に驅逐せんとするものであつた

本作戦遂行のため陸軍は野戦、百回野島方面の陸上防衛を、海軍
は海上防衛を夫々擔任するを本則とし此の方面に在る海軍部隊の
所要部隊陸上作戦に關し現地の海軍最高指揮官の指揮を受けるこ
とゝ定められた航空作戦に關しては海軍共に東支那海田邊地域に
航空戦力を展開し陸軍航空部隊は主として北支那海田邊の攻戦を海
軍航空部隊は主として米機動部隊の攻戦を擔當し夫々時攻攻戰
法に徴したる陸軍航空戦力の綜合發揮に依り東支那海田邊に來攻する
米軍を撃滅すると共に本土直接防衛の準備をも強化することゝ協
定した。此の航空作戦を天竺海戰と呼稱した

陸軍は二月上旬以上の計畫を内容とする命令を現地陸軍部隊司令
官司令長官に夫々命令し又海軍は第四節既述の如く三月二十日

附の命令を以て作戦計畫を下命した

(2) 本島守備隊の防禦計畫と兵力配分

(A) 防禦計畫

32A 司令官牛島中將は沖縄本島に位置し主力を以て沖縄本島を占
領し 68B を以て往之島を、 28E を以て宮古島、 1B を以て石垣島を、
歩兵一聯隊を以て南大東島を夫々守備し又之島守備隊は其
の一部を泊永良部島及與論島、夷界島に配備して居た
當初沖縄本島は三個師團半を以て北中飛行場を含む本島南部地
區を確保し本島北部地區は一部を以て「ゲリラ」作戦を實施せ
しめ米軍上陸直後の戦線浮動の好機に攻勢を發する豫定であつた
が既述の如く第九師團を抽出せられた爲に北、中飛行場の守備に
充當して居た 24D を南部地區に轉移させ北、中飛行場は一部の陸
時海成部隊を以て守備せしむるの餘儀無きに至つた。司令官は
大本營の要望に基き依然北、中飛行場地區の確保の意志を有し

(B) 兵力配異
 て居たが兵力の關係上十分なる兵力を配備し得なかつた又全般
 兵力の關係と離島作戰の特性上司令部内にも持久戦法の採用思
 想が底流し作戦間敷次行はれたる攻勢の徹底を缺く因を成した

配備地區	配備兵數	長
首里恩邊	62D	長
知念半島	32A	司令部官陸軍中將牛島 參謀長陸軍少將長勇
真阿武地區	24D 44Bs	長 鈴木少將
小總附近	海軍八〇〇〇名	長 雨宮中將 司令部官海軍少將大田 實

六三

北飛行場地區	臨時編合	1
中飛行場	1	大

六四

初期に於ける作戦経過の概要

(1) 米軍本隊来攻直前の状況

二月初め以来臺灣、沖縄方面に對する米空軍の攻撃は日趨激となりつゝあつた。三月上旬「マリヤナ」方面米艦隊の動向高潮し沖縄方面に對する偵察行動が活潑となり通信状況にも次期作戦の切迫とその方向が南西諸島に指向せらるゝことを示唆するものがあった。

三月十四日頃米機動艦隊が「ウルシー」を中継せること確言となつたが上陸作戦の作否か否か不明であつた。

三月十七日米機動艦隊は九州地區に來襲し各地航空基地を制壓し次いで十九日近畿、中國方面を襲撃した。三月二十三日更に沖縄本島の攻撃を實施した。然るに二十四日偵察射撃を開始するに至つた32Aは米軍の上陸作戦に對應する準備を下命した。

二十五日米軍は慶良間列島に上陸を開始した後慶良間地區に主

力を展開して居つた水上特攻部隊は攻撃の道なく潰滅し同島の地上部隊も亦潰滅した

米機動艦隊は臺灣及び九州方面よりする我が航空部隊の攻撃圏外に遊曳し五日五〇〇乃至七〇〇機を以て沖縄本島を攻撃した

(2) 我が航空作戦の發動

聯合艦隊司令長官は三月十四日米機動艦隊が「ウルシー」より出撃せること確言なりとの報を得るや此の報が上陸作戦を伴ふ場合は重難し然らざる場合は戦闘機に據る激戦に止め攻撃航空兵力を渾存する方針を以て第五航空艦隊の作戦を指導せんとした。大本營に於ても其の適否につき面談が生じ十六日避退渾存の命令を發した。第五艦隊は米機動艦隊が上陸作戦を同伴しあるや否やの確証因難なるの理由を以て午ノ米機動艦隊を發見次第攻撃するの要を意見具申したる結果之を承認せられ攻撃部隊を南九州に集結展開した。聯合艦隊は三月十七日九州東南沖に近航し來る米

機動艦隊に對する攻撃を命じた。第五航空艦隊は十八日黎明より晝夜間に亘り一〇六機を以て之を攻撃し正空母二、戰艦二、巡洋艦一、驅逐艦三の墜沈及び驅逐艦三、母艦二の大破を報じた。續いて十九日より二十一日に亘り約九二機を以て攻撃を敢行し十八日以来の綜合戦果は空母五、戰艦二、大巡一、中巡二、不詳一撃沈に及ぶ報告を得た我が喪失機數は一六一機に達した。聯合艦隊は豫期の如き米機動部隊撃滅の戦果を擧げ得なかつたが相當大なる損害を與へ得たるものと信じ米機動艦隊は一旦「ウルシー」に歸投すべしと判断した。然るに我が判断に反して米機動艦隊は二十三日には沖繩を襲撃するに至つた。是より幾二十一日大本營は沖繩方面の情勢緊迫せるに備み第六航空軍を聯合艦隊司令長官の指揮を受けしむる命令を發した。斯くて本土よりする沖縄方面の航空作戦は聯合艦隊司令長官が陸海兩航空部隊を統一指揮する組織となつた。

聯合艦隊司令長官は新に指揮に入りたる第六航空軍司令官に對して「九州及南西諸島の基地に伏撃隊し主として米機動艦隊を求めて攻撃すべき」旨を命令した。當時第五航空艦隊は十八日以来の米機動艦隊に對する攻撃に依り既に精銳兵力を消耗し直ちに出新し得る機數約四〇〇機にして第六航空軍も夫だ主力は本州に在つて展開を完了して尾なかつたのみで全く即時出動可能なる機數は僅かに六〇機に過ぎなかつた。新に追加せられた部隊も素質訓練共に不十分であつた。

更に米軍は我が豫期に反して二十五日有力なる艦隊が輸送船團を伴つて慶良間列島沖に進入聯合艦隊司令長官は天號作戦警戒を發令した。同日鈴鹿山系以西地區全海軍航空兵力を其の指揮下に入れた然し如上我が航空兵力の實情に備み聯合艦隊司令長官は米機動艦隊に對する攻撃に備へ第五航空艦隊の此の米艦團に對する攻撃を差控へさせた。第五航空艦隊は三月二十六日二十七日に

百り四十二機を以て沖縄沖の米機動部隊を攻撃し巡洋艦三、戦艦
 一機の戦果を報じ續して再び九州沖に本據せる米機動部隊に對
 し三月二十九日同三十一日の兩回に亘り五十八機を以て攻撃を強
 行し母艦一、巡洋艦一、沈没巡洋艦一、格上の戦果を報告した。此間
 第六航空軍司令官菅原中將は三月二十八日麾下部隊に對し沖縄に
 進入せる米艦隊に對し第一撃を命令した
 此の初期に於ける航空作戦は海軍航空部隊に於ては初期の如き機
 動部隊殲滅の戦果を擧げ得なかつたのみでなく攻撃部隊に依つて
 報告せられた戦果も確認困難なるものが多く米機動部隊の行動に
 鑑み其の確度に疑問があつた。一方陸軍航空部隊も死傷準備の未
 完、偵察の不十分、往之島を初め沖縄各基地の連絡喪失、米軍の
 沖縄本島上陸時機の誤判（島良間列島に對する一部の行動を本島
 に對する上陸企圖と判断した）等の錯誤に甚困し期をせべき初期
 の戦果を擧げ得なかつた

沖縄本島作戰(地上)經過概要圖



兵力部署

中飛行場	北飛行場地区	小隊地区	轉國地区	知念三島	首里前区	首里	配備地区
八	臨海八	海軍	34D	44B	62D	22A	兵團

司令部 兼 陸軍部
自衛隊

日本島を繞る攻死闘

(1) 初期の地上戦闘 32A 司令部は二十四日頃米軍の本島上陸正面を北、中飛行場正面と判断し之に備ふる所があつた。四月一日〇九、〇〇米軍は大小舟艇二〇〇有全隻に分乗し東納手海岸に上陸を開始した

飛行場北側守備隊は之に對し反撃したが戦力劣弱を臨時編合部隊をため忽ちにして攻撃力を失ひ後退の目もなきに至つた

四月四日米軍は早くも萩道一屋宜原一大山の線に進出し本島を完全に向北に分断し、北、中飛行場を占領してしまつた。

四月六日にけ飛行場の使用を開始した。兩飛行場過早の失敗は伊江島の喪失と相俟つて我が軍の戦況は益々困難ならし

(2)

其の後の地上軍の防戦闘
(A) 守備軍の反撃

32A 司令官牛島中將は米軍が未だ橋頭堡を確立し得ない隙線浮動

の空襲を担へ四月四日總反撃を決定せんとしたが同日の夜、米艦隊五〇隻が濠川正南南方海境に現れ同正面に上陸して来る算が多くと判断せられたので之を中止した。四月六日米軍は我が主陣地に對する攻撃を開始し宜野灣街道以西の陣地に侵入して來た。同夜第十方面軍司令部は 32A 司令官に對し四月八日を期し北中飛行場に向ひ攻撃に動ずべきを命令すると共に聯合陸隊及第六航空軍は總力を擧げて航空總攻撃を実施することを附言した 32A 司令官は四月八日より攻撃を中止すべき事を命令した。然るに七日午後再び約百十隻の古四式油に理出し我が側面に上陸し來ることを懸念せられたので再び中止した。然るに我が航空部隊の成果は相常見るべきものがあつて沖縄本島周囲の米艦隊の山勢列を退くもの三〇隻に達し四月十日米艦隊の戦力は更に減少した。來襲飛行機の數も減少した。聯合艦隊は此の戦況を察し一切の航空戦力を投入して總攻撃を決定する決意を塵

下の諸部隊に命令した當時地上部隊は我が主陣地前方に於ては陣地前線の争奪を繞つて終戦状態になつた
以上の野河に歸る軍司令官は十二日夕から陣前に陣集して居る米軍主力を撃滅する爲め三日目の反撃命令を下した此の反撃は守定の如く開始したが兵力の不足と決意の不堅固とに因り成果なく中止し而も損耗大なる爲め却て野河の集約を必要とするに至つた

米軍は十九日から總攻撃を開始した我が將兵の勇闘に依り辛うじて之を阻止し得たが戦力の消耗は憂慮すべきものがあつた。即ち 62D は $\frac{1}{5}$ に、24D は $\frac{1}{5}$ に、44Bs は $\frac{4}{5}$ に、As は $\frac{1}{5}$ に減耗した。軍司令官は 24D を 62D の右翼に増加併立した。此の配備變更は二十七日終了した。

32A 大六營は米軍の空海基地の推進を破壊すべき本攻の任務に對し
の作戦が消滅に過ぐるものと考へ第十方面軍司令官に對し積

七二

極的に北、中飛行場を制掘する作戦の遂行を要求した。之に對して第十方面軍司令官は再び 32A 司令官に攻勢を督促した。軍司令官は上司の命令に基いて五月四日總攻撃を執行すべく決意した。

七三

其の計畫は左翼 62D を支樑として先づ 24D を普天間東西の線に推出させ 44B を加入させて大山方向に攻勢させる。其の攻勢遂行に伴ふて支樑正所の 62D を攻港方面に攻勢に轉移せしめんとするものであつた。此間東西兩海沿沿ひに米地上軍の背後に有力なる海上陸海部隊を投入して後方を擧動する
此の第四次總攻撃は豫定の通り開始せられ其の遂行も概ね順調であつたに拘らず、米軍の機列なる砲撃に依り第一線との連絡杜絶したため師團が前線の状況を確認することなく悲觀的報告をもたらしした。軍司令官は此の報告に依り判断を誤り攻勢失敗と認め五日夕、最後且必死の總攻撃を中止するに至つた

(B) 首里の失却と御殿陣地に於ける最後の戦闘

砲撃を中止した。32Aは現在の戦線を確保する爲め方の戦力を擧げて第一線に増加した。米軍は五月十二日海兵第六師団を第一線に増加し強烈な攻撃を続行した。五月十四日遂に首里を總て奪取し及び御殿附近平良町、大名、末吉の線に移進した。五月二十日頃32Aの推定兵力は三〇〇〇〇内外軍の内井兵の数は六〇〇〇内外に減少した。火砲は小口砲火砲及迫撃砲共當初の60%に減進するに達し六月三日頃順調に御殿陣地に就いた。十一日から御殿陣地に於ける最後の戦闘が開始され十七日に至つて戦況愈々逆境に陥り軍の第一線陣地が崩壊と成つた。各部隊は夫々孤立して戦闘する状況となつた。六月十九日軍司令官は各方面に殊別の電報を發し御殿陣地の一命に於て決死と共に出陣として日本軍武士の自決の方式に因つて最後を遂げた。二十二日各

方面との連絡全く杜絶し遂に三ヶ月に亘る32Aの壯絶なる本島地上陣地の戦闘は終焉した。

(3) 航空作戦の經過

是より舊米軍の油繩本島上陸の企圖がとるや聯合艦隊司令官は方針を變更し第六航空軍の外海軍航空隊に對しても四月一日以降米輸送船團に對する攻撃を命じた。更に米軍が油繩本島に陸上基地を確立するに先ち全力を擧げて米艦隊を攻撃する決意を固めた。其の攻撃時機を四月六日と定めた。即ち第三十二軍の地上線反攻に響應し陸下航空隊の全力と存戦艦大和を骨幹とする攻撃を擧げて出陣することとなつた。此の航空隊攻撃は其の航空隊は主力を以て米機動隊を攻撃し第六航空軍、第十航空隊及び米艦隊に攻撃攻撃亦外島の其の航空隊の戦力を擧げて油繩周囲の米艦隊を攻撃せしめた。臺灣の第八飛行師団及び第二十九飛行隊も此の攻撃に協力した。第二十七艦隊及び我が航空隊は

四月六日及七日の兩日に亘り沖繩本島周邊に徘徊する米艦船並に米機動艦隊に對し必死の決戦を敢行した。七一隊に上る米艦船を撃沈破し得たことが記述された。

四月十二日本島第三十二軍の出撃に響應し戦闘機一一〇機制空の下に一二八機を以て第二次總攻撃を實施し丹波、那波以下四島の墜沈を起した。爾後聯合艦隊は六月二十一日第十次航空總攻撃に至る迄數日を間し大規模の攻撃を實施し而も此の間少敵機を以て殆んど連日攻撃を反覆し戰勢挽回に必死の努力を傾注した。四月二十五日聯合艦隊司令長官は臨遜を以て沖繩本島に兵力を投送し道上陸を企圖し五月十日此の意向を第三十二軍司令官に打電し激勵する所があつたが遂に其の戦機を作為する事が出来なかつた

臺灣方面の陸海航空部隊も此の主力の航空作戦に響應し尙ほ少敵機を以て連

陸機隊を敢行した然し乍ら米軍航空機は其の活性化、増強に次ぐ増強に因る増強者の實質部隊の低下、米軍の戦術攻撃準備の

向上等に厚田し結果は漸次低下し作戦は愈々困難を累加した。七七

此の作戦間主として沖繩周邊の戦術攻撃に参加した第十航空隊は四月十七日、爾後の死闘準備を完了し聯合艦隊司令長官の指揮を解かれた。又五月二十五日に至る迄聯合艦隊司令長官の指揮下に八回に亘る總攻撃を實施し且連日少敵機を以てする攻撃を續行しつつあつた。戦軍の第六航空隊は五月末沖繩本島の地上作戦を望み戦況の悪化より本土作戦準備を告ぐるに至つた。第十航空隊司令官の指揮に復し爾後一隊を以て沖繩米機隊に對する攻撃を遂行することとなつた。尙之に先つて五月二十四日夜一二二名の特別隊陸軍連隊（特別部隊と命名す）を以て本島北、中飛行場に飛着陸攻撃を敢行した全員壯烈なる戦死を遂げたる。戦果は不明であつたが二十七日陸軍部隊の戦死を遂げたるものゝ如く二十五二十六の兩日に亘り本島北、中飛行場の活動は完全の封ぜられた。一〇〇日に亘る此の大規模な戦に於て喪失した我が飛行機

の数は三六七六機（陸軍一八〇〇機）で其の内陸攻撃機は一八七一機（陸軍機八九七機）に達した。記録されたる戦果は米艦大破以上正空母一一隻、補助空母一二隻、駆逐艦五隻、巡洋艦二九隻、輸送船多隻に及んだが其の結果は露艦をさる陸攻機の犠牲上確証を得難いものがある。

本航空作戦の特色は陸海軍航空戦力を一機とし陸合陸隊司令長官統一指揮の下に陸海軍航空精神統一の全力を傾けて百日に亘り一機一機を居るべき陸攻機を運行し又一五二名の決死の勇士が米航空基地に強行着陸攻撃を行つた事である。数千の日本青年が祖國の危急を此の一機に託せんことを期し其の熱血を以て米艦を叩るべく奮然として光榮ある必死の重任に就て逝つたことである。此の日本青年の烈々たる愛國の熱誠と攻め精神とは異例の壯烈として永く陸軍史に記録せられ世人の敬仰を感ずるであらう。

(4) 陸軍大和の出陣

我軍を極めた油断の上、航空作戦にも備して我軍とも謂ふべき作戦は陸軍大和を骨幹とする陸攻機の陸攻出陣で存つた。一九四一年開戦直前に竣工した陸軍新六高二千機、主砲四十五種砲三陸陸機備、速力三〇ノット一月有る近代型駆逐艦を誇る世界最大最新鋭の空母大和が空前絶後の陸攻作戦に出陣し九州西南沖に於て悲劇言語に絶する沈没を遂げるに至つた経緯を茲に詳記することにする。

(A) 出陣決定の経緯

當時作戦に於れた聯合艦隊の司令長官は陸軍大和、巡洋艦多隻、駆逐艦十隻足らずに過ぎなかつた。此の殘存艦隊主力は瀬戸内海に歸投して居たが既に制空権を失ひ米空軍が本土に跳梁しつゝある當時の状況に於ては其の保ひが収められた。而も當時既に燃料難乏し僅少なる潛水艦の作戦にも専映く状況に在つた

ので前記制空權の喪失と相俟て艦隊の積極作戦は全く自信を有して居なかつた。従て南西諸島方面の作戦を計畫し進備された一九四五年の初頭には此の艦隊(2F)を使用する計畫は無かつた。然るに三月下旬沖繩に米軍來攻するや聯合艦隊司令部首席膠部の間に沖繩作戦こそ日本が望むべき一因すべき最善の時機たることを確信、四調する意見が強く出て假令今後の作戦に支障を來しても此の殘存艦隊(2F)を擧げて沖繩米艦隊に對して突入作戦を敢行せんとする強硬意見が拾取し之を大本營に具申した。

聯合艦隊は大和が沖繩に出撃するに當り瀬戸内海に在ることは企圖秘匿上危険で在る爲(2F)を佐世保に回航せんことを企圖した此の回航「コース」は下関海峡が最も好都合であるが當時此の海峡はB29の機雷敷設の虞がある許りでなく巨艦大和の海峡通過が操作上困難で在つた。結局豊後水道を経て回航することゝなり此の行動に依り米機動艦隊を誘致して基地防空部隊に據る攻

八一
艦の艦機を損傷し得ることも期待に入れた聯合艦隊は2Fに對し豊後水道を経て九州を迂回し佐世保に回航を命じた。三月二十八日2Fは呉を出港したが十九日大本營に於て此の可否に付論議が沸騰し中止を命ぜられた。

當時2Fの艦機出撃に對して燃料の面に於て最も強い反對があつた。海軍が當時保有して居た艦機燃料は僅かに一萬噸未滿に過ぎなかつた。大和が此の出撃を實施する爲の所要燃料六千噸を支出せんか爾餘の供給は絶望であつたからである。然し聯合艦隊司令部は沖繩作戦こそ帝國が勝機挽回成否を岐つ決戦なるを以て總戦力を此の作戦に投入すべきである。之が爲本土作戦準備等に破綻を來すも已むを得ないとの意見を強硬に主張し遂に大本營は之を採擇することゝなつた。此の作戦の成否に關する聯合艦隊司令部の考察は次の通りであつた。

大和特攻隊出撃圖



「豊後水道より南九州南端迄の間に飛越し危険では在るが此の間は夜間の利用に依り突破に成功し得る算が多い。南西諸島の西方に突破した後は沖縄基地の米航空部隊に依り攻撃を受けるかも知れないが沖縄米航空基地は整備未定であるから致命的打撃を受けることは有るまい。第五航空隊除（南九州其他航空隊の直接攻撃を要請したが兵力の餘裕が無い為協力を得られなかつた然し米機動隊が來襲せぬ限り恐らくは足らぬ。而も米機動隊が南西諸島を突破して以西海上に進出することには豫想せられたいから其の行動圏外を航行すれば大なる損害なく沖縄に到着し得る。此隊が沖縄の泊地に到着しさえすれば大和の巨砲を以て相當の奇果を期待し得る」

田出 撃

斯くて四月五日司令長官伊藤第一中將の坐乗する大和を護衛し、輕巡洋艦、驅逐艦矢矧、霞、磯風、雪風、濱風、朝霜、初霜、冬月、涼風を以て海上特攻隊を編成し沖繩米艦船の群に突入して彈藥生命の續く限り戦闘すべき任務が與へられた。同夜往山沖の艦上に於て征途を祝する最後の饗宴が行はれた。四月六日愈々必死の征途に上る日が來た。此日聯合艦隊司令長官は次の訓示を與へた。

「茲に海上特攻部隊を以て壯烈無比の突入作戦を決行するに至れるは帝國海上部隊の傳統を發揚すると共にその光榮を後昆に傳へんとするものなり。各、殊死奮戰敵艦隊を撃滅すべし」

午後四時出港用意の信號が大和の橋頭で響つた。矢矧を先頭に八隻の驅逐艦が二列縦陣を成り最後に大和が續く此艦隊は日暮頃には早くも二六哩の高速を以て豊後水道を抜け疾風の如く官

崎沖に突進しつゝあつた。七日傍晚迄に甌島列島の西を抜け沖繩列島の機雷敷設原の左端を大きく西方に迂廻し針路が黃海を指しある如く欺瞞しつゝ突如反轉南下して一氣に沖繩泊地に突入せんとするのであつた。此作戦の成否は一に敵の眼を掠めて豊後水道を突破し得るか否かに懸つて居るのである。不幸にして午後八時三十分驅逐艦朝潮から「ワレテキセンスイカンラシキモノノムデンタキタ」の報が大和に報ぜられ早くも不安なる豫感を抱いた曉方大隅海峡を突破する頃朝潮が機雷故障の爲離列し甌島列島線の左端が見え初めた七時十分不幸にして米哨戒機「マルチン」一機に發見された。司令長官伊藤中將は長早欺航路の無意味なるを認め一路沖繩突入點に直航する如く電命した。九時過ぎ再び沿岸哨戒飛行艇二機の觸接を受けて了つた。大和は水上偵察機七機を搭載する裝備を持つて居たが此度の出撃には一機も搭載して居なかつた。壯途半ばにして早くも不吉

なる局面に打つつかつた。

① 大和の最後

八時追及した「朝潮」から「艦爆見ゆ」「機數四十機」の飛電に接した間もなく來襲したか攻撃することなく視界を去つたと思ふ安堵の瞬間四、五十機づつの米機數群約四百機が襲ひかかつて來た。大和を初め全艦全砲火を擧げて米機に應戦した。先づ驅逐艦濱風が沈没、次で輕巡洋艦矢矧が離列し、大和は後部「マスト」附近に二發の命中弾を受け後部に火災を發し續いて左舷に魚雷二本が命中した。巨艦は傾斜したが幸に注排水装置一片側に浸水が在ると、それと同量の海水を反對側に注入して艦の傾斜を直す装置に依り復舷し速力は二十五浬を下らず。防火に成功し新設艦の威容を示して南下を續行した。十時三百機に上る米機の第二次の來襲を受けた。此の攻撃に依り左舷に二發の中型爆弾を被り上、中甲板、後部「マスト」は火の海となり左舷の對空火砲は殆ど破壊された。續いて左舷中部に魚雷

八五

が一本命中した。再び十度傾斜したが注水装置に依り漸八六復舷し二十四浬の速力を維持しつつ航行しつつあつた。然し乍ら甲板には多數の戦死傷者か放り出され其の狀凄慘を極め矢矧、磯風、濱風の姿は視界から去つて居た。第三次の米機攻撃が我が最後の敢闘になることを無量の裡に豫期し既に出航の時から必死を覺悟して居る將兵は毅然として應急食を採り光榮ある最後の闘ひに備へた。

十二時三十分、決定的の瞬間が來た。再び三百機の米機群が大和の左舷に群り襲つて來た。忽ち續けさまに左舷に魚雷五本が喰ひ込んだ。既に左舷に十一本の魚雷が命中して居た巨艦は左に十六度も傾斜した。必死の注水に依り七、八度迄回復したが中央重裝甲部を除き艦内は浸水し排水作業も及ばなくなつた。再び傾斜が酷くなつた。廿三度に達した。過度の注水に依り巨艦の浮力は失はれた。滿身創痕の巨艦は左傾斜のため左舷を海水

に併はれ乍らも沖繩突進點に向ひ阿修羅の如く南下を焦つた
 隨ふ艦逐艦は冬月、涼風、雪風、初霜の四隻となり而も損傷の
 ないのは初霜丈であつた。巨艦の浮力は段々失はれ傾斜は刻々
 増し左舷は全く海中に没し乗組員は「マスト」に黒山の如き様
 態を呈した。最後が来たにも拘らず機銃員は機關銃にしがみつ
 て守位を離れなかつた。激闘七時間余魚雷十二本大型爆弾七個
 小型爆弾無數を被つた大和は突然巨艦を大きくゆすつて左へ顛
 覆した瞬間大爆発を起して九州東南沖の海底深く没し去つた。
 大和特攻隊の消息は午後二時三十分永遠に絶たれ光輝ある歴史
 を誇る日本海軍海上部隊の歴史は事實上此の大和の悲劇的最後に
 に依り閉ざられた。

如上大和特攻隊出撃の外十七隻の潜水艦が三月より八月中旬に
 亘つて沖繩東方海面に於て作戦した。其の作戦は主として洋上に
 於て米支援部隊を捕獲し或は米補給線を攻撃した。此の作戦に於

て九隻の潜水艦を失つたが回天を搭載し之を併用して相當の戦
 果を挙げた。即ち四月中旬我が三隻の潜水艦は回天を使用し五
 隻の艦船を撃沈し其後五月には別個の潜水艦が同種の戦法に依
 り更に二隻を撃沈した。然し乍ら其の戦力微弱なる爲米軍の作
 戦に影響する様を大に寄與を爲し得なかつた。

此の外沖繩に二隊（日六八隻）の海上特攻部隊が配備せられた
 其の大部は米軍艦長間群島急襲の準備に於て名護灣及び全武
 灣に配備せられた一部は三月三十日及び四月四日米艦船を攻撃
 し夫々巡洋艦、駆逐艦等三隻を撃沈した。